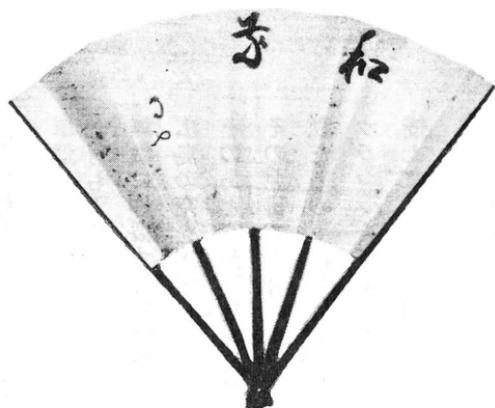


日本の心



どうもお忙しいところ、お越しいただきまして、ありがとうございます。実は柴田実先生にも本日一緒にお話していただく予定でしたが、急のご病気で、ご欠席でございますので、悪しからずご諒承いただきたいと存じます。これからいろいろお話が出るかと思いますが、どうか楽な気持ちで、ご自由にお話を進めていただければ幸いです。よろしくお願ひします。

(成田俊治事務局長の挨拶より)

出席者

武者小路千家家元

千宗守

本学教授 史学科

水野恭一郎

本学教授 史学科

伊藤唯真

本学教授 仏教学科

成田俊治

伊藤 今日の座談会の題目は、編集部の方からお話がありましたのは、「日本の心」ということですが、心と申しますと、なかなかその意義・内容、大へん多様で範囲も広うございます。日本人のもっている心理的な特性といえますか、感性と申しますか、そういった点が、ヨーロッパなり、また東洋の中でも日本以外の地域と、やはり違う点。日本で特徴的に作られたいろんな考え方。例えば、自然に対する感受性の問題など、いろんなことがあろうかと思えます。この日本人の考え方なり、あるいはまた感受性の問題なり、いろんな点、別段筋道を特に考えておりませんが、いろいろうかがっていきたくと思っております。

日本の心といった場合、伝統的な芸能のことなども考えられますが、今の伝統的芸能の多くは、その形成が中世の頃にあるように思われます。茶の湯にいたしましても、能楽にいたしましても、中世文化が、現代の日本の文化の淵源と申しますか、源流と申しますか、そういう風に考えられておりまして、日本の心というものを考える場合、やはりそういった時代に見られるもの、その中でまた、それ以前からずっと地下水の如く流れているものが、中世の頃にパッと出てくるというような点もあろうかと思っております。そこで日本的な心を考えていく一つの道といたしまして、日本人の持つております自然観というようなものも取り上げることもできると思いますが、茶の湯の中でも、やはり自然といったものに対する考え方、心構えなどがあるように思われます。例えば、花に対する考え方、あるいは四季に対する日本人の感覚などについて、家元のお考えなどを、お聞かせ願えればと思います。

千 ご承知のように、濃茶や薄茶のお点前てまの中で、「茶筌ちせんとうじ」をします。茶碗の中へお湯を入れて、茶筌を湯どうしする所作しよさです。これは茶筌の穂先に異常がないかを調べると同時に、茶筌の穂先を温めて竹の繊維をやわらげ、使いやすくするためです。流儀によって、「茶筌とうじ」、「茶筌どうじ」などともいいますが、私どもでは「とうじ」といいます。人間が温泉へ行つて体調を整えることを「湯治ゆぢ」といいます。湯をくぐらせて茶筌を整えるこの所作は、共通するところがあります。群馬県桐生近在では、手打うどんをうでるのに使う籠を「とうじざる」という由ですから、「とうじる」という動詞があるわけでしょう。

またお点前の終りの方で、茶碗に、お湯でなく、水を入れて、同じような所作をするのを、「茶筌すぎ」と申します。洗濯するのに水よりは湯の方がよごれ落ちがよいことは常識ですので、なぜ茶筌を水ですすぐのかとの質問をよくうけます。お湯を節約するためですかといわれる人もありますが、それよりは、日本人の古来の考え方として、人工の加わったお湯よりは、天然のままの水の方が、物を清める神秘的な力が強いんだという信仰と申しますか、——

伊藤 そうですね。

千 体を清めるのでも、最高の方法

は、「水ごり」でございますね。それから、**蹲踞**（茶席の入口にある手洗鉢）に、極寒の季節には湯桶を添えますが、その湯は、手を洗うのには使わず、口をすすぐためにだけ使うしきたりです。その心は、手はやはり水で洗わねば清らかにならない。しかし口は、冷たい水ですすいで舌が麻痺したために、せつかくのお茶を十分味わえないと、申訳がないから、ぬるま湯を使えというのです。



千 宗守 氏

水野 先程ちよつとお話に出ましたが、日本では神道の上でも、古くから「水ごり」をとることに神聖な意味を感じてい

るようなこともありまし、また、水の神というものも非常に大事にしますね。例えば、水源の清浄なところには、水分社が祀られ、その地域の人々の厚い信仰をうけています。

千 それでいて、水の良い悪いはあまり考えないんですね、日本人は。この点は中国人の方が真剣ですね。『茶経』などに具体的に書いてあります。

水野 しかし千さんは、お茶の時、やはり水の良し悪しということ、——

千 そりや、考えております。ありがたいことに、日本は、殊に京都は良い水にめぐまれています。現に、京都の茶の湯の家が、北から順に、今日庵（裏千家）、不審庵（表千家）、官休庵（武者小路千家）、長生庵（堀ノ内家、表千家門人筆頭）、燕庵（藪ノ内家）、ほぼ南北の一線上にならんでいます。ここは平安奠都以前の加茂川の旧川筋で、地下水は今も変わらず良水が流れています。私どもの先祖がここに居を定めたのは、この良水のためだと思います。

伊藤 京都は、それこそ山紫水明のところですから、水も良水が得られるわけですね。

水野 それから、日本人の自然観ということから考えますと、日本には殊に春夏秋冬、四季の移り変りにともなつて、野の花、山の景色、その他いろいろ、四季それぞれに心にしみる趣きがありましてね。そういうところが、また日本人に春夏秋冬その時その時の自然の中から何かを感得させるものがある。そんなものが日本の自然の風物の中にあるような気がしますが。——

千 それは大いにございますね。
水野 そして茶の湯でも、殊に千さんは茶花にご関心が深く、書物なども書いておられますが、この茶花も、やはり日本人の自然観というようものが、茶室の花の中に四季いろいろと出ていると思うのです。——

千 利休七ヶ条にも「花は野の花のように」とありますが、「野の花そのまま」とは書いてませんね。問題は「よう

に」というところ。極端ないい方ですが、人間の手で鉄を入れた途端に、野の花そのままではなくなるわけです。たしか僧正遍昭の歌に、「折りつれば、手ぶさに汚る、たてながら、三世のほとけに花たてまつる」というのがございますね。仏さまにお花をあげたいけれども、私の汚れた手をふれたら、それだけでも天然の清らかな花が汚れそうです。それよりは、「生えているまま」でみそなわせという意味でしょうか。良いお歌だと思いますね。

利休のいう「野の花のように」とは、人工を加えねば茶室の床の花にならぬが、野の花の清らかな美しさを一層強調できるように工夫しろとの教えでしょう。これは口でいうのは簡単ですが、実行は大変むずかしい。——

それにしても、この頃は、花に季節がなくなつてまいりましてね。

水野 本当にそうですね。日本人に季節の感覚がどんどんなくなつていゝ。これは食膳にのぼる食べ物ひとつにしまし

ても、ほとんど一年中、手にはいる。花にしましても温室で、——



水野 恭一郎 氏

千 一番早く季節感がなくなつたのは菊の花ですね。料亭の床には一年中、菊が生けてありますし、告別式の献花も年中、菊です。

水野 とところで、千さん、茶室のお花に、用の花とか、不用の花とかいって、使つてはいけないとされている花がありますね。あれは、やはり何か、基準のよなものがありますか。

千 昔からいう禁花の条件のひとつは、香りがきつすぎる花で、お茶の香りを邪魔するからです。そのほか、華やか

すぎる花。また、桜のように散りやすい花も、「しづ心なく」て、和敬清寂境には向かぬとされ、また、とげのある花も遠慮します。尤もこれは小間の茶室の場合で、広間では条件が大分ゆるやかになり、牡丹のような豪華な花でも生けます。また梅はかなり香りますが、正月の床には欠かせぬものです。この時も椿が主役で、それに、つぼみが二三輪ほころびそめた梅の短い枝を添えるだけです。椿は香りのさわだたぬ花で、オペラ「椿姫」の原作のアレキサンドル・デュマ・フィスの小説の女主人公も、「この花は香りがなから好きだ」といっていますね。

水野 それから残花といいますが、遅くなつてからの花は、あまり使わないという、——

千 それは名残りの時だけ、——

水野 名残りの時は使うわけですか。

千 今の暦の十月、旧暦の九月の茶の湯を「名残り」の茶と申します。今（六月）丁度お茶を製造し終つたところですね。これを茶壺に詰めて、夏の間は愛宕

の山など涼しい所に預け、立冬の時分から、この壺の封を切つて使いはじめます。いわゆる「口切り」で、その口切りの前一ヶ月間を、去年から使つてきたお茶とのお別れという意味で「名残り」といいま
す。この時に限つて、季節遅れの花や狂い咲きの花が、却つて名残りの風情にふさわしいとしてよろこびます。それ以外は、季節丁度のものか、心持ち早いもの。
水野 早いですね。
千 遅れたら、ご馳走にならないという考え方ですね。また名残りの時には、欠けた茶碗を繕つたものなどが、一度なくなつた命を、繕つてまた用いる点で、名残りの茶の風情と見る、——

伊藤 なるほど、お花の中でもその香りのきつすぎるものとか、華やかすぎる花、あるいは散りやすい花は使わないというお話がありました。そういつたものが茶室の中にありますと、お茶をいただいている者の気持に静けさといえますか、そういうものが乱されることになるわけでしょうね。
千 ですから、日本の国花である桜が使えませんね。彼岸桜だけは使います。これは、しおらしい咲き方だからでしょう。利休忌の茶室の床には彼岸桜が約束で、——
水野 利休忌には菜の花も使いますね。あれはどうして、——
千 利休が豊公の命で切腹したのは天正十九年二月二十八日ですが、あの年は正月間、太陽暦では四月二十二日には正月間、京都から堺へ下る途中は、山崎とか、大阪と堺の間の遠里小野とか、油の原料の菜種の本場の土地があり、丁度菜の花の盛りだったでしょう。ですから菜の花を使つて供養するのは合理的ですね。
水野 なるほどね。利休忌は今ほ三月二十八日ですか。
千 はい。一月遅れでやつております。祇園祭が旧暦の六月七日と十四日とでしたのを、新暦の七月十七日と二十四日に行われるように、四十日遅らせる方が、季節的には無理がないのですが。——

伊藤 なるほど、そうですね。
千 暦がこんな変なことになりましたので、余計、世間の方の季節感が、——
伊藤 そうですね。季節感に随分ずれが出てきましたね。

千 今は新暦七月七日に七夕さまを祭りますが、まだ梅雨の真最中で、天の川どころじゃありません。幼稚園が休みになるまでによつておこうという気持はわかりますがね。

伊藤 しかし、もともと日本人ほど季節に対する感覚が敏感な国民は少ないのではないのでしょうか。手紙の書き出しひ



伊藤 唯真 氏

とつにしましても、時候の挨拶から始めますね。ただ、その書きます文句でも、例えば初夏ということは、旧暦の場合、当然、四月が初夏ですが、今だつたら六月頃にならないと、初夏という語を使うのが悪いような気がしたりなんかして、非常にずれがありますね。

千 五月初めの連休の頃に、新聞でもテレビでも「五月晴れ」という言葉を使いますね。しかし五月晴れというのは、本来、旧暦五月の梅雨の合間にたまたまかつと照りつける「梅雨晴れ」のことでしよう。連休の頃は旧暦四月、卯月で、古人は卯月に降る雨を「卯の花くたし」といった筈。それに近頃はまた「菜種梅雨」という妙な言葉を使いますね。

水野 そういう昔からの古い言葉では、日本人は季節季節でなかなか良い言葉を作り出していると思いますね。「さみだれ」なんていうのもね。あの「さ」は五月の「さ」でしょうか。「みだれ」は水垂れだろうと思いますか。――

千 五月の「さ」かも知れませんか。

水野 五月の水が垂れる、で「さみだれ」になつてるように、語感のよい、どこか雅な言葉を、日本人は作り出すのがうまいと思いますね。

千 季節感といえ、二十年くらい前に稽古場で、ご年輩のご婦人のお話に「孫に胡瓜の匂(しゅん)ということをお教えるのに汗をかきました」と、――

水野 匂ねえ。本当に匂というのは、なくなつてきたようですな。

千 今は、しかし、冬の胡瓜の方が却つておいしくて、夏の胡瓜はまずいですね。

ところで、また茶室の花のことに戻りますが、世間一般の方は、いわゆる「茶花」は、特殊な花を使わねばならぬものだと思ひ込まれ、その花材について非常に関心をお持ちのようです。ところが、「馬に喰はれる」くらいの路傍の雑木である木槿の花が、夏の茶室の花のスターです。それ故、茶花の本質は、花材よりも入れ方にあると思います。というのは、生花は仏前の莊嚴から始まつて、床飾り

に発展したものですから、ご本尊である掛物に対して、あしらう姿をとります。

茶の湯の中で一番本格的な「正午の茶事」の場合は、茶室の床に初めは掛物をかけ、途中で掛物を取り去つて、床正面中央の釘(中釘)に花人を掛けて、花を入れます。この場合、花はご本尊に対するあしらいではなく、ご本尊のお身代り、いや、ご本尊そのものです。奈良の薬師寺の三尊仏でも、両脇侍はご本尊にあしらつて、少し腰をひねつて立たれる(この姿が実に魅力がありますが)のに対して、ご本尊はどつしりと結跏趺坐のお姿です。ですから茶室の床の中釘に掛けた花は、安定感があるべきです。しかも掛物に代つて一座の人の目を引きつけるだけの力を持たねばなりません。山奥の珍花を入れて自慢しているご亭主がありますが、この種の花はご本尊としての力感に欠けるが多いようです。

水野 茶花の話は一応それくらいにしておきまして、また、お茶の世界では、



「佗」とか、「寂」ということが、よくいわれます。茶の湯の発展の中で、「佗茶」というのは、やはり村田珠光あたりから考えたらいいわけですか。

千 まあ、そういうことでしようが、しかし珠光ひとりではなく、その時分一世紀ほどの間の大勢の人の工夫が積み重なって、徐々に変わっていったので、その代表選手が珠光・紹鷗・利休ということになるんじゃないですか。

水野 珠光が大和の国聚古市播磨守澄胤に与えた「心の師の文」と呼ばれているものがありますね。あの中で茶の心と

して、「冷え枯れる」ということをいっています。この「冷え枯れる」というのは、どういう風に解釈したらいいでしょうね。

千 「ばさら」の反対じゃないですか。

伊藤 「ばさら」の反対だとしますと、枯淡とは、ちよつと違いますか。

千 冷静、集中でしょうか。お茶の味わいというか、人間の体に対する反応が、お酒の反対ですね。お酒をいただく気持ちが発散しますが、お茶の方は静まり集中しますね。ですから、このお茶をいただくことを目的とした集会は、求心的なものを要求してくる筈です。「ばさら」時代は、お茶は付きもので、むしろ酒盛りとか、懸け物とか、そういうものが目的であって、――

水野 「ばさら」時代とは、南北朝から室町初期の「茶奇合」といわれた頃のものですね。この茶寄合の流れで、やはり古市氏に関係がありますけれども、室町中期の応仁の乱前後の頃、「経覚私要鈔」などに出てくる淋汗茶の湯。あれは古市

氏を中心に、奈良近郷の武士や庶民たちが集まって、風呂を焚いて、その浴後にお茶をやりますね。

千 蒸風呂でしようけどね。

水野 蒸風呂で、その風呂あがりにということなんです。それに、かなり豪華な部屋飾りのことも出てきますね。あれは風呂のあがり屋でしようね。

千 あがり屋です。時代は後れませんが『長閑堂記』の中に、紹鷗が風呂のあがり屋で茶事をされたということが書かれていますね。紹鷗のは、もう淋汗じやないのでしょうか。暑い季節に淋汗の様式を加味して、わび茶の湯をされたわけでしょう。淋汗茶の湯は結局、室町中頃、――

水野 応仁・文明頃まででしょう。しかし、あの頃でも、淋汗茶の湯では、やはり非常に豪華な「ばさら」的な部屋飾りをしているように見えますね。

千 風呂あがりは気分が開放的になりますから、所詮、求心的な茶じゃないですね。

水野 そういうことですね。ところが村田珠光は、あの古市氏あたりと、かなり深い関係があった人だと思えるんですね。

千 ええ。尤もそれだけに彼等の茶風に反抗を感じたのかも知れませんよ。

水野 淋汗的なものへの批判というようなものですね。珠光が奈良から京都へ出てきて、大徳寺の休禪師などと交わっている間に、一休の影響をどれほど受けたかはわかりませんが、淋汗茶の湯の「ばさら」的なものと反対のような、佗とか、冷え枯れた境地といったようなものを求める、そういうところへ行つたような気がしますね。

千 先程いいかけた『長閑堂記』の文句は「釣瓶の水指、めんつう（面桶）の水こぼし、青竹の蓋置、紹鷗或時、風呂のあがり、そのあがりやにて数奇をせられし時、初めて此作意ありとなん」とあります。この時の紹鷗は、実用井戸の釣瓶に冷水を汲んで持って出て、そのまま水指として使つたのだと思うんです。それに

基づいて利休型の木地の釣瓶の水指という檜の木地の器の規格が出来、それが風呂の季節の水指としては最高のものとして、今日も扱われます。しかし冬は使えません。四角い炉のそばに四角の釣瓶は、釣り合いません。炉の時は、木地曲の水指という杉の曲物の器を使います。夏と冬と形は変わるが何れも素木の水指が、どんな名物、名器とでも取り合わせていいという、オールマイティの扱いをうけるしきりです。

水指は茶入や茶碗の背景になるべきものですから、陶器の水指ですと、前に置く茶入れと邪魔し合うことが起り得る。木地の水指なら、このおそれがないからとも考えられますが、それよりは、人工を加えない素木のままのものに神秘的な美しさを感じる、日本人本来の考え方によるのではないでしょうか。そして釣瓶の水指を使う時には、前の日から水につけて、十二分に水を含ませておき、点前を終つて水指を持ち去つたあとの畳の上に、濡れた形が残るほどに

するしきりです。水を含ませるのは、素木の清々しさを強調する手段であるとともに、お客さまを迎えるために表換えをしたばかりの畳が、ぐっしり濡れて傷んでも、貴方をおもてなしするためなら、これくらい何でもございませんと、「すきたぎる」茶人の心意気を見せるんですね。

伊藤 釣瓶も、先程の「花は野の花のように」のように、やはり釣瓶として使われていたような状態で、――

千 『長閑堂記』に書いてあるのは、井戸に備えてあつた釣瓶のままを利用したのだと思います。それが大変効果的だったから、後にその形にまねて檜でこしらえて。――丸い釣瓶ではなくて四角い釣瓶ですから、多分「はねつるべ」でしょう。

水野 話がまた少し変わりますが、お茶の世界では「和」ということが殊に大切にされ、「和敬清寂」という言葉なども、茶の湯の境地を表わす言葉として、よく使われます。

この「和」については、既に早く聖徳太子も憲法十七条の第一条に、「和を以て貴しとなす」といつておられますが、日本人は本来、和ということを非常に重んじてきたのではないのでしょうか。

千　　そうですね。殊に風土が穏やかだし、島国で、あまり外からの危険を感じないし、まあ平和なんでしょうね。

水野　「やまと」の国というのを「大和」と書いたのもね。これは倭国ということに関係があるかも知れませんが、ともかく「和」の字を当てたということは、やはり日本人が和ということを重ねていたことを考えさせられますね。今でも日本のことを「和」といい、日本の文が「和文」であり、日本人の心が「和魂」であって、――

伊藤　やはり日本のような農耕を中心にやってきた社会では、一緒にみんな協力し合ってやらねばならぬというところで、和が必要なんでしょうかね。

水野　和というと、また「やわらかく」、「やわらかい」という感じですね。

千　　目にする国土の景色が、やわらかだったからでしょう。大陸に比べれば。

水野　和が「やわらかさ」だということに関連して、どうでしょうかね、日本人は形の上でも、何かやわらか味のある、直線的ではなくて、曲線的なものに美しさを感じるという。――

千　　それはありますね。

水野　成田先生のご専門の仏像なんかも、飛鳥時代の頃の中国・朝鮮あたりから渡ってきた仏像には、何か固さというものを感ずるんですけども、それが白鳳の頃のものになりますと、曲線的な、



やわらか味が出てくる。そこに日本的なものを感ずる。――

成田　そうですね。

水野　文字にしても、中国の文字を日本に取り入れたわけですが、その中国の文字である漢字の草書体から、やわらかな曲線の美しい「ひらがな」というものを作り出してきましたね。

千　　三高に入った頃、法隆寺夢殿の秘仏の救世観音を初めて拝観した時、こわいと感じた覚えがあります。

水野　確かにそういう感じがありますね。ところが、同じ法隆寺にあっても、白鳳期の夢違観音とか、橘夫人厨子の念持仏（阿弥陀三尊）など見ますと、やわらかい曲線の美というものを感ずります。

どうも日本人には、そういう曲線的なものに殊に美を感ずるというところがあるように思えるんですが。これは、やはり日本の風土と関係があるんでしょうね。

千　　殊に、この京都の山川の姿も、大きく働いていますね。

水野　それから今、元号のことが問題

になつていますが、古くからの日本の元号を見ますと、現在も昭和ですが、「和」の字のつく元号がかなり多いですね。奈良時代の和銅を最初として、平安時代の承和・仁和・応和・安和・寛和・長和・康和・養和など、凡そ二十ばかりありますよ。一番多いのは「永」の字だったと思います。が、「和」も非常に多いですね。このように元号にも「和」の字が多く使われているということも、日本人が古くから和を好んでいたことの一証しよ左にもなり、そういう意味では、日本人は本来、平和を愛する民族だったといえるんじゃないでしょうか。

千 ええ、平和を愛し、自然を愛し。

ところでまた季節の話ですがね。三高で藤田元春先生の人文地理の時間に、日本の季節の移り変りは旧暦よりも一月ずれる。中国の北京あたりならば、立春になれば確かに春のきざしがあるが、日本は湿気が多いために一月ずれる。それを大陸の文物を鷓呑みに輸入して、旧暦一月・二月・三月を春としたけれど、実際

は旧暦の二月・三月・四月、太陽暦ならば三月・四月・五月が春でなければ不合理だというお講義を承ったのが、いまだに忘れられません。

伊藤 やはり肌で感ずるところの季節

の感覚でしょうね。文字とかではなしに。

千

はい。またこれは池坊短大の教授をしてらした植物学の浅井敬太郎先生

のお説ですが、「梅にうぐいす」というけれども、梅の花がほころびそめる頃に、うぐいすの初音はつねの聞ける土地は、日本中で、京都と、あと一ヶ所しかないということなんです。どこだと思えますか。

水野

京都と、あと一ヶ所ですか。一

伊藤

千 ええ、山奥などではなくて人が普通に住む所で、もう一ヶ所だけあるんです。それはね。九州の球磨川の上

流だそうですね。それ以外の所は全部ずれていて、桃にうぐいすや、桜にうぐいすの所もあるのだけれども、京都の文化が日本中を覆ってしまつたので、どの地方へ行っても、「梅にうぐいす」でなければ

ばならなくなつたというのです。

伊藤 季節の中でも特に秋ですが、日本人の考える秋と、ヨーロッパ人の考える秋は、ちょっと違うという随筆を、吉田健一さんが書いておられる。どう違うかと申しますと、どちらも次に厳しい冬が来るといふ認識では共通しているけれども、ヨーロッパの場合の秋は、冬になる前に取り入れの喜びというか、そういうものを感じずる秋だと。ところが日本では、すぐ淋しさと申しますか、そういうものと結びついてくる。そこに大きな違いがあると、こういうことをいっておられます。なるほど日本の秋と申しますと、絵画にいたしましても、野辺のすすきとか、あるいは、浦の苦屋くやの秋の夕暮というようなところが描かれる。秋に対しては、そういう寂莫さびのさびしさを感ずるといふ。そこで、それを通してまた、人生というか、宗教といえますか、そういうものと合わせて考えるというようなことがうかがわれますが。

水野

日本人の心には、確かに秋とい

えは何か淋しさを感じるし、春といえは明るい華やかさを感じるということはありませんね。これは、やはり日本の風土、その季節の山川の姿からくる感覚だともいえましよう。

伊藤 それと、いまひとつ、人生の青春から壮年、それから老年へという、その移りゆきと、自然とダブらせて考えて、秋に淋しさという感情が出てくるかもわかりませぬね。

話はちよつと変りますが、先程も話がありました中国そのほか外国のものが日本へくると、受けとめ方が少し違つて、日本的なものになるといふことの例で、これは成田先生がよくご存じの阿弥陀仏に対する信仰についてですが、この阿弥陀信仰というのは、インドにもあるし、中国にもある。ところが日本へくると、阿弥陀の信仰の中でも、特に、その来迎（らいぎやう）という面だけがクローズアップされ、強調されてくる。なるほど經典などには来迎（らいぎやう）ということ書かれてあるけれども、阿弥陀に対する一つの信仰が、来迎とい

うことを通して強く受けとめられてくるのは日本だけで、そこから聖衆（しやうじゆ）来迎（らいぎやう）という風なものが出てくる。しかも、その聖衆来迎図は、山というような自然の中で、桜の咲く谷底に往生者（おしやうしや）がいて、そこへ山の彼方から阿弥陀が来迎するということ図柄（ずがら）になっている。なるほど日本の受けとめ方だなあと思っています。その点、成田先生どうですか。



成田 俊治 氏

成田 中国でも、經典を絵画に表わすことはありますが、日本の場合のように、自然を表わして、その中に、しかも宗教的なものを表わしてきたのは、まことに日本的な点だと思えますね。

千 ところで、日本で昔から一番（いちばん）気のあるご本尊は何さまなんでしょう。やはり阿弥陀さまですか、観音さまですか。

伊藤 そうですね。現世利益（げんせいりやく）の点では観音さまが、来世信仰に関しては阿弥陀さまが、そして、お地藏さまは現世と来世との中間での救済者といえましようか。

千 京都以外の地方にも地藏盆がありますか。

水野 近畿以外では、あまり聞きませぬね。地藏盆の盛んなのは、やはり京都大阪。それから、伊藤さん、近江地方はどうですか。

伊藤 近江も、京都に近いあたり、大津のような都市風のところ、殊に多く見られますが、農村部でも、子供が小屋掛をするなどして、なかなか盛んですよ。

千 大阪でも、戦災前には随分盛んでしたね。

成田 私は、出は愛知県ですけども、小さい時から京都で育つて、子供の時分には、八月の二十三日の晩が非常に楽し

みでね。町内寄りまして、世話して下さる方々が、福引をしたり、お化け屋敷みたいなことをしたり、そういうことをずつとやっていまして、楽しかったですね。

伊藤 ところで、先程申しました阿弥陀信仰が、日本では来迎が特に取りあげられて、日本の受容になるのと同じように、お茶も中国にあつて、それがこちらに伝わってくると、おのずから、その取りあげ方が違ったものになつてくるんですね。

水野 やはり風土の違い、伝統的な感性の違いもあつて、お茶でも日本では、中世の茶の湯に見られるような極めて芸術的な香りの高い独自のものを生み出してくることになるんでしょうね。

千 それと、あの珠光から紹鷗・利休の時代は、まさに戦国の世で、明日は命がないかも知れない世の中でしたから、茶の寄合でも、今日の日にこの一室に集まった人間のつながりを大切にしようという気持が切実だったでしょうね。これは、太平洋戦争中、京大の国史研究室で

午後のひとときに、信楽の火鉢にかけたやかんの湯で、よくお茶をたてて飲みましたよね。

水野 そうでしたね。――

千 あの時のお茶の味には、まことにしみじみとしたものがあつたように思えますね。配給の豆粕などを炒つて、ひいて、こねたような菓子を交替に持つて来たりして、午後のひとときは必ずお茶を飲みましたね。空腹を紛らすためでもあつたけど。――。

水野 そういう、今日の一日、その時その時の「ひととき」を大事にするということは、やはりお茶の作法の上にも出てきているといえますね。

千 いわゆる「一期一会」というのも、今日のこのメンバーは、他日また寄るかも知れないけれども、その時は、ある人は今日よりは成長しているかも知れない。ある人は体が弱っているかも知れない。だから、このお互いが、この状態で集まれるのは、今日このひとときだけという考え方ですね。

水野 だから、そのような今日この時の一度の寄合というものを、非常に大切にしたのでですね。

伊藤 本当に、そういう一期一会という気持で寄り合い、接待するのが、真のお茶の心というべきでしょうね。

千 茶の家元の相統披露の行事として、正午の茶事の連会をさせられます。使う道具も料理も、毎日大体同じですが、一回ずつお客さまが違いますから、それに対して、こちらがどう対応するか。いわば毎日が応用問題で試験をされているようなもので、いやでも力がつきますね。ですから倅にも、いくら時代が変わっても、このしきたりは実行するようにと、いつております。

伊藤 まことに日本の心ということから、茶の湯の心の真髓のところまでお話ししていただき、まだまだ話は尽きませんが、この辺で対談を終ることにいたします。長時間にわたつて、いろいろ蘊蓄のあるお話を、本当にありがとうございます。